ECHOES　曲目解説

1.風の声、光のうた／本田優一郎 作曲(2021)　※ワタナベギター 使用

ホラネロが弟子屈町でコンサートをした際、一本のガットギターに出会いました。作者の方は退職後の10年間で88本ものギターを製作したそうで、素材には北海道木材がふんだんに使われています。
花畑に風が吹き渡り、太陽がふりそそぐご自宅で、何年も眠っていたこのギター。本田が磨いて弦を張り替えたところ、息を吹き返したように温かな音色が響きはじめました。楽器を通して作者が伝えたかったメッセージを感じてもらえたら嬉しいです。

2.たんぽぽの咲くころ／本田優一郎 作曲(2021)

北海道の冬は氷点下まで落ち込むため、多くの養蜂家は寒さに弱いミツバチを越冬させるためにトラックで本州に移動させます。訓子府の菅野養蜂場でも同じ方法を取り入れています。本州でミツバチを越冬させている間、家では小さな子供たちとお母さんはお留守番です。「お父さんいつ帰ってくるの？」と待ちわびる子供たちに、お母さんは「雪が溶けはじめたらね」「ふきのとうが出たらね」と言い聞かせながら春の訪れを待ったそうです。そしていよいよ「たんぽぽの咲くころ」長い越冬期間を終えてミツバチと一緒にお父さんが帰ってくるのです。
たんぽぽは、北の養蜂家にとって節目を表す大切な花。
曲の中には「シーミミー♪」のフレーズが繰り返し出てきますが、これは英語で蜂を表す「BEE」を示しています。タンポポ畑を飛び交うたくさんのミツバチの姿を想像しながらお聴きください。

3.ほんの気持ち／本田優一郎 作曲(2022)

津別から遠軽に引っ越すことになり、段ボールの山に埋もれるようにして暮らしていた時のこと。台所作業もままならない時に「ピンポーン」とドアチャイムが鳴りました。玄関先には一人の女性が立っていました。「引っ越しちゃうって聞いたからさ。大変でしょ？良かったらこれ食べて」と言いながら、赤飯、卵焼き、温かい豚汁に加えて靴下まで添えて差し入れてくれました。差し入れを持ってきてくれたのは、津別のローカル新聞「津別新報」を30年にわたって作り続けてきた相沢真由美さん。
後で見つけたのですが、小さなメモに「ほんの気持ち」とマジックで書かれていました。
この心温まる出来事を、お世話になった津別での思い出と共にメロディに託しました。

4.KIRAWAY（2023）

中標津町にある佐伯農場マンサードホールで開催された「duskの晩餐会」。dusk（夕暮れ）の名前の通り、日没時間に合わせて始まり、みんなで明かりの灯った食卓を囲みました。食卓を彩るのはこの日一日限りの架空の料理店、duskさんが手がけた、こだわりの地元食材を使った目にも美しいディナーでした。この時のミニコンサートで初演されたのが「KIRAWAY」です。
KIRAWAYとは、佐伯雅視氏ら地元酪農家によって作られた北根室ランチウェイ（※）の通称で、道東に“歩く文化”を普及させるという大きな目標のもと、8年かけて中標津町と弟子屈町を結ぶ71.4kmのロングトレイルを切り拓きました。美しい景観と地域文化に魅了され、閉鎖されるまでの10年間に世界各国から3000人以上が訪れ、交流を深めたそうです。
※ランチ＝ranch(牧場)

5.見上げてごらん夜の星を／いずみたく 作曲（1963）※ワタナベギター
6.上を向いて歩こう／中村八大 作曲（1961）

どちらも永六輔の作詞で、長い歴史の中で受け継がれ、時代も国も越えて愛され続ける名曲です。「見上げてごらん夜の星を」は夜間学校に通う学生を、「上を向いて歩こう」は安保闘争に負けた若者を励ますための歌と言われています。
人々を励ます、という共通のテーマを持つこれらの歌は、コロナ禍が明けて再開したホラネロのコンサートでもよく演奏しており、聴衆の皆さんにも「前向きな気持ちになれる」と喜んでいただいていることから、今回収録することにしました。

7.せせらぎの小径／本田優一郎 作曲(2024)

皆さんはセロトニンを知っていますか？セロトニンとは別名 幸せホルモン。心のバランスを取るのに必要な物質です。
セロトニンを生み出すには①太陽光 ②コミュニケーションやスキンシップ ③リズム運動 が有効なのですが、約3年のコロナ禍でこの３つを実施する機会が少なくなり元気がなくなる人が増えました。そこで、音楽からのアプローチで健康に少しでも役に立てないかと『津別町人づくり活動支援事業』の助成を受け、本田がセロトニントレーナーの資格を取得。北海道の森の中で音楽的アプローチからセロトニンを増やす為のプログラムを作り提供してきました。この曲で使われている打楽器-ラヴドラム-を森のせせらぎの中で叩き始めると、プログラムに参加した皆さんに笑顔が溢れ出したのが思い出されます。ホラネロの活動の核「社会に役立つ音楽活動」の一環で行っています。

8.モリノオト／本田優一郎 作曲（2022）

「地域の子どもたちが地元の自然を舞台に自発的に考え、表現できる学びの場を提供する機会を作れないか」というテーマで意気投合したホラネロ、猛禽類医学研究所、そしてラポールくしろが、三社協働で生物多様性やOne Healthの重要性を学習する1泊2日の体験ツアーを開催しました。その名も『親子で行く！学びのバスツアーin阿寒「森を聴く」音楽×生物学』。
ツアーでは猛禽類医学研究所の見学の後、獣医師によるガイドのもと阿寒の森を歩きました。
私たちの身近に暮らすシマフクロウをはじめとする野生生物の生態について学び、その生物たちが普段聴いている森の中の様々な音に注目しながら“音探し”をしました。ツアーの最後に、みんなで集めた“音”で楽器を作り、作曲体験をしたのがこの曲の成り立ちです。

猛禽類医学研究所の研究林で“音探し”

9.ECHOES／本田優一郎 作曲(2024)

「Obsidian song」を作曲してから約12年が経ち、遠軽町では去年、町内で出土した黒曜石の石器が国宝に指定されました。人口減少が進む地域にとっては貴重な明るい話題です。その黒曜石の魅力を、音楽を通じて広めたいという思いから、“音探し”を始めました。まずは埋蔵文化財センターで黒曜石を割ったり削ったりする石器作りの音をサンプリングしました。現場の空気感が伝わるように、テンポよく石を割る音はそのままリズムや音程として使用されています。

また、長い年月にわたり町内で黒曜石を研究しておられる本吉春雄さんを訪ねてお話を伺いました。その時におっしゃっていた「小さな黒曜石の断面に見える波紋のように、人の輪が広がって地域全体で盛り上がってほしい」という言葉が印象的でした。
せっかく灯った“街のあかり”。調査・研究に携わる方々の想いを受け止め、ホラネロが波紋の役割を果たして地域の魅力を伝えることができたら良いなと思います。(写真：本吉春雄さんのご自宅にて)

10.アバリ／本田優一郎 作曲　ななみじゅん 作詞
11.北のひかり／本田優一郎 作曲　ななみじゅん 作詞

オホーツク海に面する雄武町の漁業協同組合で音探しをした「アバリ」（4thアルバム「ヒグマのうた」収録）と、訓子府町開町100周年に寄せて開拓をテーマに作られた「北のひかり」（5thアルバム「THE SECOND FRONTIER」収録）が歌になりました。歌っていただいたのは北海道を代表する歌手、KAZUMIさん。歌詞がついたことでより多くの方に気軽に親しんでもらえたら嬉しいです。
（このプロジェクトは「わが村運動活動助成事業」として実施しました）

【KAZUMI　プロフィール】
江差追分日本一を決める第29回江差追分全国大会で見事17歳にして優勝。第3回秋田長持唄全国大会 優勝。イギリス・スランゴスレン国際音楽祭 フォークソングソロ部門 日本人初優勝。北海道の伝統的音楽である江差追分を中心とした音楽活動を展開。
海外でも公演しその才能が高い評価を得ている。

『アバリ』　　作詞：ななみじゅん

静寂(しずか)に生命(いのち)が揺れる　朝日が滲む　午前５時

海原　夜明けに乗り出す漁船の　戦う男たち　潮焼けた姿

豊漁　網打ち込む　鮭獲る　祈りを込めて

静寂に生命が燃える　吐く息白む　澄んだ空

カモメが群れ飛ぶ　漁船の帰港(かえり)を　迎える女たち　湯気立つ姿

母なる海の恵み　頂く　祈りを捧げ

遥かな生命を護る　遍く宿る　海神(わだつみ)

手を取り　我ら繋ぐ絆　アバリ　生きとし生ける　すべてに感謝し

子孫(わがこ)に伝える想いと　巧みのすべてを　アバリ

豊かに広がる　この海　遺すため

『北のひかり』　　作詞：ななみじゅん

夢抱き獅子たち乗せ　さぁ船出　帆を上げよ
命かけて　北へ　彼の地へ　荒波耐え　幾夜越えて

見晴るかす地　踏みしめ　いばらの道を臨んで
荒れ果てた地　耕し　拓(ひら)け　北に光る大地を

晴れ渡る大空見上げ　働くぞ　腕まくり
五穀豊穣　明日へ　未来へ　声を嗄(か)らし「どっこいせ！」

鍬を振り　汗流し　泥にまみれ　日が落ちる
星屑に願いかけ　夢を叫べ　生きる力を

道はまだ遠くても　くじけそうになる時も
友よ　また日は昇る　あきらめるな　自分信じて

胸を張り　前を向け　ヘソに力　たぎらせて
君を待つ　道を行け　ひとりじゃない　照らせ大地を